

## ビジターセッションで参加者双方は何を得るか —留学生と日本人学生によるスピーチ作成に向けた会話の分析—

小笠 恵美子

### 要旨

本稿ではビジターセッションを通してスピーチの準備をする実践を取り上げる。そこで生じた問題点を示し、より意義深いビジターセッションのための方策を考察する。日本語のクラスのビジターセッションは、普段知り合うことのできないビジターと日本語学習者の交流による参加者双方の学びと表現技術の向上という意義がある。その実現のために会話において学習者が主導権を取れるように、授業で経験した手順でスピーチ作成のためのブレインストーミングをするように指示した。ビジターセッション中の会話を分析した結果、学習者が話題を提示して会話の主導権をとっていたが、ビジターと学習者の関係は日本事情の情報提供者と質問者という関係にとどまっているように見えた。また、学習者はビジターから得た情報を無批判にスピーチに取り入れるという事態が見られた。この実践の問題点を示すと共に、教師の対応について述べる。

### キーワード

ビジターセッション、会話の主導権、双方の学び、交流、情報

#### 1. はじめに

本研究は、日本語の授業に日本人ビジターが参加することが、留学生、日本人ビジター双方にとってより意義のあるものにするにはどうすればいいか考察することを目的とする。

日本語のクラスに日本人ビジターを迎える実践は既に多くの教育機関でなされており、それぞれの機関で異なる意義があるであろう。例えば、教師以外の日本語に触れる機会の増加、日本事情の紹介といった意義や、日本国内で生活をしていても自分から日本人と関係を作る方法を知らない（あるいはその機会のない）学習者が日本人と交流する機会という意義が考えられる。しかし、ビジターセッションに参加しても、一過性の交流イベントにすぎず、その後の交流の継続、新たな学びや発見の場になっていないという問題も指摘されている。

本実践も日本人との交流を求める留学生の要望に応えるために行われた。クラスは半年から1年間の交換留学生が多く集まる日本語のクラスで、参加していた留学生は日本に留学しているにもかかわらず日本人の友人がいない、日本人と話したり交流したりする機会が少なく、校内の寮で同国人と交流することが多いという問題を抱えていた。一方、同校の日本人学生は、同じ学内に多数の留学生がいることに気づいておらず、実際に外国人と交流する機会のない者も多いという状態であった。このように同じキャンパスで学んでいるが相互に交流の機会を持たない状態は留学生を迎え入れている意義を問い直す必要がある事態ではないかと考えてビジターセッションを行った。ビジターセッションを通して交流が進み、留学生には留学した意義を発見することを、日本人学生には留学生を知るこ

とで「外国人」のステレオタイプを超えた発見をすることを期待した。それと同時に、教師は「表現技術の向上」という課題があり、ビジターセッションが実際にその能力の向上に有用であることを望んでいる。そこで、ビジターセッションではできるだけ互いの心情が吐露でき、その後作成するスピーチに直結するような身近なトピックで話し合いをさせようとした。

## 2. 先行研究

母語話者(以下 NS とする)と非母語話者者(以下 NNS とする)の話し合いにおいては、NS がイニシアティブを取る傾向があると言われており(Zhu 2001)、NS と NNS の接触場面の研究では、「(母語話者は)自らが会話を主導する必要を強く感じている。・・・一方、非母語話者は受動的に質問に答える(情報提供)か、相槌で反応する。」(一二三 1999)という研究がある。つまり、留学生の日本語クラスに母語話者である日本人学生のビジターを入れるということは、ビジターが会話を主導する可能性が高いということであろう。一方で、NS、NNS による会話の主導権の偏りがなくなっていく状況の分析(岩田 2005)もある。ここでは会話を継続する中で NS、NNS は、相互に興味の共通性や似たような体験を発見すると同時に「愛好家同士」、「体験を共有する者」といった新たなアイデンティティ・カテゴリーを形成し、NS、NNS というアイデンティティ・カテゴリーを越えて関係性を形成していく様子が示されていた。

また、NS、NNS による協働的な作文活動の研究(岩田、小笠 2007)では、作文の推敲活動で、NNS も授業中に提示された文章構成を表す語彙(アウトライン、問題規定文、根拠など)を使いながら、積極的に活動に参加し、NS と対等に話題展開の主導権をとれることが明らかになった。このことから、授業中の活動を通して提示された活動の手順は、NS も NNS も同様に習得しており、NNS は手順を示す語彙を使用して話題展開の主導権をとっていると考えられる。

そこで、本実践では、NS、NNS 間で会話の主導権の偏りをなくすために留学生が優位に立てる状況を設定して話し合いをさせることにした。つまり、留学生が授業を通して何回か体験しているスピーチ作成のためのブレインストーミングをビジターセッションで行うことにした。このように、話し合いの進め方という点では留学生のほうに慣れており、主導的な役割を果たすことが予想される状況では、ビジターはどのように会話に参加するであろうか。また、ビジターの発言は留学生のスピーチにどのような影響を及ぼすであろうか。

## 3. 研究課題

本稿では、ビジターセッションの実践例を取り上げ話題の展開、話題提示者、話し合いの内容とスピーチの関連に着目して、どのような話し合いがなされたかを示す。また、そこで生じた「交流」の実態を明らかにすると共に、一過性の交流を超えた学びが留学生・ビジター双方に生じるためには何が必要か考察する。

## 4. 分析

### 4. 1 研究対象

本実践は、留学生 (NNS) のための口頭表現の上級クラス (日本語能力検定試験 2 級取得が条件) でおこなった。このクラスは 2007 年 9 月から約 3 ヶ月 (13 回) にわたって開講され、15 人の留学生が毎週 90 分のクラスに参加していた。クラスの参加者は、交換留学生、大学院進学希望者であり、母国でスピーチ作成、論文作成の経験があるものと思われる。出身は韓国 (8 人)、台湾 (1 人)、タイ (2 人)、ロシア (3 人)、ドイツ (1 人) で、9 月の開講直前に来日した者 (13 人) と、半年前に来日した者 (2 人) が参加していた。ビジターセッションは 5 人のビジターが参加し、4 人 1 組 (NNS3 人、NS1 人) で話し合いをした。ビジターは日本語文法、日本語教育法などの講義に出席しており、ボランティアとして留学生のための日本語クラスのビジターとなったことから、留学生との交流に強い関心を持っていると思われる。しかし、「日本語教育」「スピーチ作成」に関する知識、興味があるとは限らない。

#### 4. 2 ビジターセッションの概要

ビジターセッションを行ったクラスでは、会話およびスピーチの作成発表を主に行い、できるだけ発話の機会を増やして言語能力を向上させることを目的としていた。ただし、留学生のための授業であり、常時参加者は留学生であるため、授業中の会話は留学生同士で行うことが多かった。そのため留学生から「日本人学生と話をする機会がほしい」という要望が生じ、それに応える形で 11 回目の授業でビジターセッションを行った。

ビジターセッションはスピーチ作成の一過程に組み込んで 90 分間の授業 1 コマを使って行った。スピーチは、各自テーマ案を持ってグループでブレインストーミングを行う→ブレインストーミングを基にアウトラインを作成する→スピーチを作成する、という手順で作られ、ビジターセッションは、スピーチ作成の前のアウトラインを吟味するための時間として設けられた。留学生はビジターセッションの前に 2 回、同様の手順でスピーチの作成を経験している。

スピーチのテーマは「日本での生活で問題に感じていること」とした。テーマを制限した理由は、自由なテーマでスピーチを作成すると問題提起や解決のための提案に至らないことがあったからである。また、このテーマは留学生にとっては自身の現状を振り返り、身近に感じている問題を掘り起こすことができるので、過去に他のクラスで取り上げた際に、最も活発に意見が出たテーマであった。

ビジターセッションの 1 週間前に留学生のみのクラスで、5 人 1 組でブレインストーミングを行い、各自の考えたトピックについて話し合いをさせた。ここでは、以下の「スピーチ作成のための質問項目」に答えられるかどうかを確認させた。これを通して「問題提起」→「問題の重要性」→「原因」→「解決」という構成をもったスピーチを作成させようとした。

- ・ スピーチで取り上げる内容は本当に問題なのか？  
(重要な問題か？本当にそうなのか？)
- ・ 問題の原因は何か？・問題解決のための提案・提案は実現可能か？  
(どう実現できるか？)・実行が難しい場合、他の方法はあるか？

スピーチ作成のための質問項目

留学生はこのブレインストーミングを元にアウトラインを作成して次週のビジターセッションに備えることになっていた。

ビジターセッションでは90分の授業時間を使ってグループのメンバー3人のアウトラインすべてについて、「問題提起」→「問題の重要性」→「原因」→「解決」という構成にそって互いに説明及び問題点の指摘をするなど、構成、内容について吟味することを求めた。この際に、再度上に示した「スピーチ作成のため質問項目」を確認した。90分の配分は各グループに任せることにした。この際の会話はデータとして録音し、状態の良かった2グループ(グループ①、グループ②)を分析の対象とした。

ビジターセッションの次の週には、ビジターセッションで行ったアウトラインの吟味を元にスピーチを作成し、発表することを求めた。

#### 4. 3 分析観点

データは、話し合いの話題展開と話題の提示者、話し合い内容とスピーチの関連性という2つの観点から分析した。留学生は既にスピーチ作成のために質問項目一覧の内容で話し合いをした経験があるため、留学生が会話の主導権を取り、話題提示者として、「スピーチ作成のための質問項目」に合わせて話題を展開することが予想された。そこで、実際に留学生は話題の提供者となれるのか、なるとしたらどのような話題で提示者となるのかに着目した。また、教師が目的とする「表現技術の向上」という点ではどのような影響があるのか明らかにするため、話し合いの内容とスピーチの内容の関連性を分析観点とした。

### 5. 結果

#### 5. 1 話題の展開

話題は概ね質問項目一覧の質問の順に展開した。グループ①は「問題点→問題の具体例→原因→解決方法」の順に、グループ②は「問題の重要性→原因→解決方法(自分たちにできること)」の順に話し合いを進めた。また、問題の具体例や解決方法を話す過程で日本での事情と各国(自身の出身国)の事情を説明し合う、ビジターに日本の事情、問題の原因等を聞くといった話題が見られた。以下にその例を示す。(グループ①の会話。留学生を I1、I2 と示し、日本人学生を J1 と示す。)

〈例 1〉

- 1 I1: 一番よく出るごみは何ですか。日本は、食べ物のゴミはそのままですか。他に集めるとかじゃなく。
- 2 J1: そうね、生ゴミはそのまま
- 3 I1: これは、くさくなる。大丈夫ですか。
- 4 J1: そんなに長い間おいておかないから。
- 5 I1: 毎日毎日そうじしたりしますよね。日本は。
- 6 J1: 燃えるごみの日は週に2回。夏はくさくなる。
- 7 I1: 韓国では動物にあげたりする。
- 8 I2: ドイツではそのままおいて、3年間かけて、土にする。
- 9 J1: コンポストは日本では、町の中ではなくさいから。あまり知らない人が多い。
- 10 I2: コンポストというんだ。
- 11 I1: 韓国でも、
- 12 J1: 日本は夏は暑いし。北海道ならいいかも。

〈例 1〉は I1 が「日本の生活で問題と感ずること」としてゴミの問題を取り上げた際のものである。I1 は自身が寮でパーティーをしようとして、菓子類を買ったときに大量のゴミが出たことからこの問題を取り上げたが、そこから粗大ゴミや収集の際の分別の方法が話題になった。I1 は下線の発話 1 で、食物のゴミを話題として提示し、J1 に日本でのゴミの処理の仕方について質問している。それを受けて J1 は発話 2 で日本の事情について説明をしている。その後、発話 7、8 で I1、I2 は自国の事情を説明し、その中で提示されたコンポストについて、発話 9 で J1 が再び日本の事情を、背景を交えて説明、発話 11 で I1 が自国の事情を説明するという具合に、各国事情の情報交換をしながら話題が展開していく。この結果から、ビジターは日本の事情、日本人の考え方の一例を示すものとして情報を提供する役割を担っている様子が窺える。

## 5. 2 話題の提示者

話題の提示者は主に留学生だった。グループ①では会話中 15 回の話題変更があったが、そのうちビジターによる話題の提示は 2 回だった。グループ②は 16 回の話題変更のうち、ビジターによる話題提示は 3 回であった。以下に留学生による話題変更の例(例 2)とビジターによる話題変更の例(例 3)を示す。(例 2、3 ともにグループ②の会話で、例 1 とは話し手が異なるが留学生を I1、I2 と示し、ビジターを J1 と示す。以下の例も同様。)

〈例 2〉

- 13 I1: 電車の中で電話できないのは法律でできないんですか、礼儀でできないんですか。
- 14 J1: 法律じゃなくて、マナー、マナーの問題
- 15 I2: あー
- 16 I1: じゃあ、電車の中で食べる物が、禁止の問題もマナーの問題?
- 17 J1: あんまり匂いのきついものを食べると周りの人に迷惑だから。
- 18 I2: ふーん

〈例 2〉では、留学生 I1 の「日本の電車の中で携帯電話を使うことができない」という問題をスピーチのテーマとして話し合っている。I1 は、電車の中で電話を使うと、周りの日本人の目が厳しく感じられるという経験から、電車内での通話禁止は法律なのではないかと思ひ、ビジターの J1 に法律なのか、礼儀なのかと、日本の事情に関する情報を求めている。これに対して J1 は携帯電話の使用制限は、法律ではなくマナーの問題であり、自粛すべきだと答えている。I1 はそれを受けて、新しい話題として、電車内でのマナーに関わるものとして電車内での飲食を取り上げ、更に日本事情に関する質問している(発話 16)。J1 は質問に対して「匂いのきついものを食べると・・・」と説明し、この説明に対して I1、I2 は異議を唱えることなく納得している。I1 の「マナーの問題?」という質問は、日本のマナーについては J1 がよく知っているという考えに基づいて行っており、J1 の答えに疑問を持った様子はない。

このような、留学生が質問をしてビジターが答えるという形式の情報のやり取りは別の場面でも見られる。

〈例 3〉

(小学生が携帯電話を持っている問題について)

19 I1: あー、小学生の携帯を持っているのは問題だと思いますか

20 I2: 問題だと思います

21 I1: なんで問題だと思いますか。私は小学生が・・・

(略 小学生が電話料金を払えないことについて話が続く)

22 J1: 問題になっているのは、お金っていうのは・・・例えばなんかモバゲー<sup>注 1</sup>  
とか

23 I1: モバゲー

24 J1: モバゲーというのは・・・

〈例 3〉は I1 が、小学生が携帯電話を持っている日本の事情について、J1 に質問し、J1 がそれに対して、日本で小学生が携帯電話を持つことを問題視する理由を説明し、その過程で「モバゲー」という新たな話題を提示している(発話 22 の下線部)。この例は、例 1 で取り上げた「電車内での携帯電話禁止」は法律による禁止ではないと知った I1 が、新たなスピーチのテーマとして小学生の携帯電話使用を取り上げたものである。I1 はこの問題について、小学生が際限なく電話を使うため親の経済的負担が大きいという点から話題を展開しようとしたが、J1 は有害サイトによる犯罪の問題を指摘して、新たな話題を提示している。

このデータではビジターは話題を提示することはあっても、それは留学生の質問に答える過程で提示するのみで、会話の構成を決定するものではなかった。この場合、話題を主導的に決定する者は留学生だと考えられるが、留学生はビジターを、自分たちよりも日本事情に詳しいオーソリティとして説明を求めている様子が窺える。その際に、ビジターは新たな語彙の提示、日本の事情を説明する中で会話を主導的に導くことがある。

以上のように、ビジターセッションでの話し合いは、主に、それまでに経験した授業と同様の手順を追っているため、その手順に慣れた留学生(NNS)が積極的に話題を提示している様子が見られた。

### 5. 3 話し合いの内容とスピーチの関連性

ブレインストーミングで話し合った内容と、作成されたスピーチ内容の関連性を確認すると、留学生はブレインストーミングでビジターから得た日本の事情をそのままスピーチに反映させている様子が見られる。例えば、グループ②の I1 はもともと「電車の中で携帯電話を使用してはいけないという、日本の法律を変えるべきだ」という内容のスピーチをするつもりであったが、ビジターの J1 がそれは法律で決められたことではなく、マナーであると言うと、I1 自身が電車内で電話を使うことができず、困っているという問題を抱えているにも関わらず、テーマを「電車内での携帯電話の使用について」から「小学生の携帯使用の問題」に変えた。そして、「小学生の携帯電話使用を禁止すべきだ」という主張の根拠として、例 3 にあるように、自身が考えていた経済的負担ではなく、J1 が提示した問題のある

サイトを挙げた。このことから、I1 はスピーチを J1 からの情報を頼りに作成したことが窺える。このテーマ変更の過程で I1 は、J1 の説明の通りに問題の所在を示しており、I1 自身の調査、考察を加えた様子がない。このことから留学生はビジターからの情報を吟味することなくそのままスピーチにしてしまう可能性があることがわかる。

#### 5. 4 ビジター(日本人学生)にとってのビジターセッションの意義

留学生がビジターから日本の事情を情報として得ている一方でビジターは留学生から何を得ることができるだろうか。まず、留学生が語る日本と自国の事情の違いから刺激を受けて、それまで当然として見ていた日本の習慣や状況を他国と比較したり、批判的に見たりするといった、日本事情に対する新たな視点が考えられる。次に留学生が日本で生活する中で感じられた日本の社会に対する感想や意見を知ること、留学生の置かれた状況(外国で生活することの困難など)の疑似体験が考えられる。しかし、留学生が置かれた状況を身近な例から理解することの意義を、ビジターが理解しているかどうかについては疑わしい。例えば、留学生が言語的弱者として困っている自身の例を話しても、その状況を理解したとは思えない発言をすることがある。

##### 〈例 4〉

25 I2: メールをするだけで 10 分以上かかるから、全然なれていないから、遅いんですよ

26 J1: マナーを守らなければならないから、僕は出ないですね。絶対。

(略)

27 I1: でも、実は今、日本の若い人も、時々、電車の中で、電話をかける、ですね

28 J1: そういうちょっと、アホなやつも、私的には、2, 3 秒とか、4, 5 秒くらい電話しても大丈夫だと思いますけど、重要だし。

〈例 4〉は、電車内での携帯電話のマナーをスピーチに取り上げようとして、ブレインストーミングをしている際の会話である。ここで、I1 は「留学生はメールを打つことが難しいので、電話をしたいが、電車内で電話をかけると、周りの人がとても厳しい眼で見る」ということに問題を感じており、もっと電車内の電話の使用に対して寛大であるべきだというスピーチを作ろうとしていた。しかし、そのブレインストーミングに参加したビジターの J1 は、電車内での電話使用に対して、厳しい発言をしている。初めは「僕は出ないですね。絶対。」と言い(発話 26)、その後留学生の眼から見て、日本人は厳しすぎるという話を聞いた後も、「日本の若い人も、電話をかける」という発言に対して、「そういうちょっと、アホなやつも」と、厳しい評価をしている。この後も、J1 は電話の使用について「すぐに用件を言って済ませるならいい」と言いつつも、「べらべらしゃべるとバカに見える」という発言もしており、自身の厳しい姿勢を変えている様子はない。ここで、J1 は留学生がメールを打つことの大変さについて全く言及していないことから、J1 が留学生の立場を理解

したかについては疑わしい。ビジターセッションは、ビジターにとって、留学生の立場で感じている日本の社会を理解する絶好の機会であるにも関わらず、J1はその機会を有効にとらえていない可能性がある。

## 6. おわりに

以上のように、ビジターセッションで、留学生(NNS)は今まで授業を通して経験した話し合い手順をふんで、積極的に話題を提示している様子が見られた。この結果から授業の準備によってNS、NNS間の会話の主導権の偏りを避けることが可能であると言える。一過性の交流に生じがちな母語話者優位の関係は留学生に慣れた形式で、主導的に準備した内容の話し合いをすることによって解消できると考えられる。

また、本実践をとおしてビジター(日本人)と留学生(外国人)というアイデンティティ・カテゴリーを超えた交流に結びつくやり取りができたかについては疑問が残る。授業のテーマが「日本の生活で問題に感じたこと」であったこともあり、留学生は自身の日本での生活で感じた個人的な疑問を話題にし、ビジターに対して日本の事情、日本人の考え方の一例を示す者として情報提供を求めるといった事態が生じていた。このようなやり取りの後に互いの個人的な考えを述べ合うということも可能であろうが、本実践では、日本での生活と他国の生活の差が話題になることが多く、各自が出身の違いというアイデンティティ・カテゴリーを超えた話をするのが難しかった。この結果から、出身地の差を積極的に明示するようなものを会話のテーマとする場合、そのテーマの意義、会話参加者たちがどのように話題を発展させていくかについて配慮する必要があると言える。例えば教師はビジターセッションの前に、留学生の語る「日本にいてびっくりしたこと」について、ビジターは個人的にどう思うか、似たような経験をしたことがなかったか聞いてみることを促すといった指示をする必要があるだろう。

また、スピーチ表現技術の向上という点については、スピーチのための情報の扱いについて注意すべきことが示唆される。留学生は、ビジターセッションで得た情報やアイデアをそのままスピーチに反映させることがあり、その際にスピーチ作成者が自身の話そうとしたことを安易に変更して、ビジターのアイデアや情報をそのままスピーチに利用する可能性もある。教師はビジターセッションを行うに当たって、ビジターからの情報は必ずしも裏づけのあるものではなく、スピーチに利用する際には事実であるか否かの吟味が必要であること、スピーチの作り手はあくまでも留学生自身であることを伝える必要がある。大学生を対象とした日本語の授業でのスピーチ作成には、語彙、文法の学習以外に、文章構造の習得、日本語での情報獲得の方法、クリティカルな思考を持って情報に当たる訓練なども組み込むべきであろう。つまり、スピーチのために、一日本人の情報をよく吟味することなく取り入れる態度は問題と考へて、指摘する必要がある。教師は、普段の授業内で、情報を吟味する必要性についても繰り返し伝え、情報の取得、吟味を普段の授業の活動に組み入れる必要があるだろう。それには、スピーチ作成の事前に行うブレインストーミングやアウトラインの時点で提案された意見や事例の素となる情報がどこで得られたかを確認するという方法がある。また、読解や聴解の授業でも一つの話題について2つ以上の意見が示された内容や、討論場面を扱うことによって、それぞれの意見や事例の問題点を挙げるという方法も考えられる。

最後に、ビジターセッションは、双方にとって今までに会ったことのない相手との交流であり、双方が同等な立場での会話の場面を設定するべきではないか。つまり、留学生のみならずビジター自身の学びの場として位置づけ、それをビジターにも自覚させるために、留学生との接触によって得た発見、自身の変化を認識するためのタスクを用意することも必要なのではないか。具体的には、ビジターセッション前後に、留学生(外国人)に対する自身のイメージや考え方、セッションによって発見、理解したことを文章化させることによって、ビジターセッションの意義をより明確なものにするという方法や、簡単なタスクシートに「ビジターとして参加する目的」、「目的を達成するための自身の取り組み」、「参加後の自己評価(目的が達成できたか)」といった内容の記入・提出を求めるといった方法も考えられる。

## 7. 今後の課題

本実践で見られた結果はあくまでも、一例である。全てのビジターセッションで同様の結果が生じるわけではないが、ここで見られたビジターセッションの問題点を改善することによって、留学生のスピーチはどのように変化するか、同時にビジターセッションそのものに変化は生じるかを明らかにしていく必要がある。

(小笠恵美子おがさえみこ・東海大学)

注1 モバゲー：モバイル ゲームのこと

付記 本研究は、文部科学省の科学研究費補助金(平成18~21年度基盤研究C, 課題番号18520403「大学教育への社会的要請に応える日本語表現能力育成のための統合・協働的カリキュラム」, 研究代表者大島弥生)からの助成を得た。

## 参考文献

- 池田玲子、館岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために—』ひつじ書房 p. 63
- 岩田夏穂(2005)「日本語学習者と母語話者の会話参加における変化—非対称的参加から対称的参加へ—」『世界の日本語教育』15
- 岩田夏穂、小笠恵美子(2007)「発話機能から見た留学生と日本人学生のピア・レスポンスの可能性」『日本語教育』133
- 一二三朋子(1999)「非母語話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連—日本語ボランティア教師の場合—」『教育心理学研究』47
- 梶原綾乃(2003)「留学生と日本人学生との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」『日本語教育』117
- 田中綾乃(2006)「ビジターセッションで留学生と日本人協力者は本当に「話せた」か」『WEB版日本語教育実践フォーラム』
- Zhu, W. (2001) Interaction and feedback in mixed peer response groups, *Journal of second language writing*, 10, 251-276.